

中国語テキストにおけるディスクール/イストワール ：時間の指示子による形式的識別

中里見，敬
山形大学教養部中国語研究室 | 山形大學教養部公共漢語教研室

<https://hdl.handle.net/2324/6461>

出版情報：山形大学紀要．人文科学．13（1），pp.233-249，1994-01-31．山形大学
バージョン：
権利関係：



中国語テキストにおけるディスコース/イストワール

—— 時間の指示子による形式的識別 ——

中 里 見 敬

(教養部 中国語研究室)

山形大学紀要（人文科学）第13巻第1号別刷

平成6年1月

中国語テキストにおけるディスコース/イストワール

—— 時間の指示子による形式的識別 ——

中 里 見 敬

(教養部 中国語研究室)

0 はじめに

フランスの言語学者バンヴェニスト Émile Benveniste が提出したディスコース discours / イストワール histoire という概念は、のちにバルト Roland Barthes やジュネット Gérard Genette の物語論 narratologie の基礎となったように、文学研究にとっても有効なものである。ところが、従来の中国語・中国文学研究は、形態変化や時制を持たない中国語の性質のゆえに、西洋の言語学の成果を直接中国語に適用することには慎重であった。本稿では、ディスコース/イストワールの区別が言語の普遍的性質として中国語にも存在し、特に時間の指示子の使い分けにその区別が典型的に表れることを明らかにしたい。こうした言語的事実の基礎のうえに、テキストに即した文学的分析の道が開かれることになるであろう。

考察の順序は次のとおりである。はじめにディスコース論の物語論における射程を確認し、また中国語への機械的適用を批判する論を検討したうえで、白話・文言・現代文のそれぞれについて、時間の指示子を指標とした中国語テキストのディスコース/イストワールの識別について考察する。

1 バンヴェニストのディスコース論とジュネットの物語論

ジュネットの物語論の基礎となる物語言説 récit / 物語行為 narration / 物語内容 histoire という重要な概念は⁽¹⁾、ことばの二面性⁽²⁾にかかわる二つの理論、すなわちソシュールによるシニフィアン/シニフィエと⁽³⁾、バンヴェニストによるディスコース/イストワールを掛け合わせることによって成立している。物語論はこうした一般言語学の成果に由来すると同時に、ジュネットの分析対象であるプルースト『失われた時を求めて』をはじめ、二十世紀になって現れた多くのアヴァンギャルドなテキスト——「何が書かれているのか」という物語内容に対する関心からだけでは到底読むに堪えないような——を後追いするかたちで、現実の作品理解の必要に迫られて生まれたものだといえる。そのような意味で、物語論を西洋思想・言語学と西

洋の文学現象という固有の歴史的文脈から切り離すことは不適切である。しかし、ソーシャルやバンヴェニストが、かりに個別言語を扱っていても、常に一般言語学への関心と洞察に支えられているように、ジュネットの物語論も、単に西洋の文学現象を分析する道具という限定をはるかに超えて、一般理論としての普遍性を獲得していることは正当に評価されるべきである。

なかでも、バンヴェニストの有名なディスクール/イストワールという概念は、ジュネットにおいて物語行為/物語内容の区別へと発展したもので、ジュネットの物語論を考えるうえで欠かせないものである⁽⁴⁾。要点を確認するなら、物語言説においては不可避免的に、物語言説を語る此岸としての物語行為と、それに対して物語言説によって語られる彼岸としての物語内容という、二つの時間・場が存在する。そして、テキストにおける仮構の存在としての語り手と聴き手は前者に属し、作中人物は後者に属するのである。

バンヴェニストはディスクール/イストワールの区別が、フランス語においては動詞の時称と人称という形態に表れることを明快に述べている。

○イストワールの方の言表行為は、今日では書く言語にしか用いられないが、過去の出来事を物語るのがその特性である。この三つの用語、《物語》と《出来事》と《過去》とは、平等に強調されねばならない。これは物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示するものである。それらの事実、起こったこととして記録されるかぎり、過去に属するはずである。(中略) 言表行為のイストワールの面がそれと認められるのは、動詞の時称と人称の二つの範疇を同時にとらえて、それに特殊な限定を加えていることによる。(中略)

ディスクールというものは、そのもっとも広い意味において、すなわち話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為として理解される必要がある。(中略) 歴史叙述の最中にディスクールが現れるとき、たとえば歴史家が作中人物のことはをそのまま再現するとか、みずから介入して報告された出来事の是非を判断するとかの場合には、必ず別の時称体系、すなわちディスクールの時称体系に移行する。この瞬間的な移行を可能にするのがことばの特性なのである。⁽⁵⁾

バンヴェニストはさらにこの区別が、一般に人称代名詞・指示代名詞・直示子（ダイクシス）と呼ばれる副詞——バンヴェニストはこれらを総称して指示子 *indicateur* と呼ぶ——にまで及ぶことを論じた⁽⁶⁾。

一方、ドイツのヴァインリヒは、同様の事実を、語りの時制/説明の時制という異なる術語で指摘している。

○一つの言語にはその諸時制を二つの時制群に分けるような一つの視点がある。私は二つの

グループをとりあえず時制群Ⅰ，時制群Ⅱとよぶ。ドイツ語で時制群Ⅰに入るのは現在，現在完了，未来，未来Ⅱのような時制であり，時制群Ⅱに入るのはその他の過去，過去完了，条件法，条件法Ⅱのような時制である。（中略）

トーマス・マンはゲーテについて，前半と後半とで全く別の述べ方をしている。前半ではゲーテの死を述べている。その扱いは，われわれの文学ジャンルの理解では物語 Erzählungである。（中略）

そのあと，われわれが区切ったまさにその箇所で，トーマス・マンも自らテキストに明確な区切りを記している。つまりかれは聴衆に向って「諸君」と呼びかけている。（中略）それはひき続きゲーテの話ではあるが，もはやゲーテの生と死は語られず，ゲーテ独自の作家活動の特徴づけ詳論することになる。「物語」が中断された後のいま，ゲーテの作家としての天性と作家的存在条件が主に説明されているのであると言いたい。（中略）

さて二種類の時制群を区別できると考えてきたわれわれの仮説をさらに進めて，時制群Ⅰは説明の時制 besprechend. Tempus 群とし，時制群Ⅱは語りの時制 erzählend. Tempus 群と解釈することにした。⁽⁷⁾

ジュネット，バンヴェニスト，ヴァインリッヒの以上の用語を整理すれば次のようになり，いずれも二層からなっていることがわかる。

物語行為＝ディスクール＝説明の時制（＝語り手の　語る　現在）

物語内容＝イストワール＝語りの時制（＝語り手によって語られる過去）

さて，時称や人称による形態変化を持たない中国語の動詞は，ディスクール/イストワールの識別標識となりえない。しかし，指示子のうち，特に時間の指示子には，ディスクール/イストワールの典型的な使い分けが認められると考える。本稿ではこの点について考察する。

2 形式的識別に対する批判

拙稿「話本小説における物語行為」⁽⁸⁾は，指示子の使い分けによるディスクール/イストワールの識別を基礎として，話本小説の物語行為を考察したものであった。これに対して，鈴木陽一氏は「小説研究の方法をもとめて——中里見論文を評す」⁽⁹⁾において，一部に根本的な批判を提起された。

○中国語の指示詞の使い分けに，フランス語の代名詞における「histoire と discours」のレベルでの使い分けを機械的に当てはめた議論は説得力に欠けるのみならず，誤りさえ犯している。

鈴木氏はこのように述べたうえで，二つの例を挙げている。そのうちの一つ「這」「此地」という場所の指示子については，「這」に「この」という指示代名詞的用法と「ここ」という場

所詞的用法とがあるうえ、用例が少なく不分明な点が残るので、今回は論じないことにする。
ここでは鈴木氏が、

○「明兒」（＝「明日」）は『紅樓夢・二十三回』においてもなお「the day after」の意味であり、中里見の言うレベルで「次日」と用法が異なっているわけではない。

という、時間の指示子にしばって、中国語におけるディスクール/イストワールについて考えることにする。

鈴木氏の指摘する例は、次の箇所だと思われる。

○寶玉着了忙，向前攔道：「……原是我說錯了，若有心欺負你，明兒我掉在池子裏，教個癩頭龜吞了去，變個大忘八，等你明兒做了一品夫人，病老歸西的時候，我往你坟上替你馱一輩子的碑去。」⁽¹⁰⁾

ここでの「明兒」は、地の文ではなく、宝玉のセリフの中に現れていることにまず注意しておく。つまり、この部分は（仮構の語り手を話者とする第一次物語言説、すなわち地の文に対して）宝玉を話者とする第二次物語言説なのである。そして、「明兒」はその話者・宝玉の発話の時点を中心とした「今兒」に連なるディスクールの用法であることは明らかであって、イストワールの「次日」とは混同しえないものである。なぜなら「次日」は、宝玉自身の属する言表行為の時間とは異なるところの、宝玉によって語られるもう一つの物語内容（メタ物語世界）の時間軸、すなわちイストワールの時間軸の基準「此日」に連なる「次日」であるからだ。

ただしこの「明兒」は、厳密な「あした」という意味を超えて、発話の時点を中心として漠然とした「みらい」という派生的な意味で使われている。その点に関して、太田辰夫氏がこの用例の「明兒」に対して「これからさき、将来」と注釈する⁽¹¹⁾のと同様に、鈴木氏がこれを「the day after」の意味に解することは妥当である。それでもなお、「明兒」は発話の時点を中心としたディスクール特有の用法であるという言語的事実は正しく認識しておく必要がある。したがって、かりにこの「明兒」を「次日」に置き換えると、「我」「你」というダイクシスとなじまないだけでなく、宝玉は自分の語る時間とは別次元のもう一つの時間に属する人物について述べているような奇妙な効果が生まれるのである。

○寶玉着了忙，向前攔道：「……原是我說錯了，若有心欺負你，{明兒/?次日}我掉在池子裏，教個癩頭龜吞了去，變個大忘八，等你{明兒/?次日}做了一品夫人，病老歸西的時候，我往你坟上替你馱一輩子的碑去。」

それに対して、「将来」に置き換えることが可能なのは、「将来」という語がディスクール/イストワールの違いに対して非関与的であるからである。

○寶玉着了忙，向前攔道：「……原是我說錯了，若有心欺負你，{明兒/将来}我掉在池子裏，教個癩頭龜吞了去，變個大忘八，等你{明兒/将来}做了一品夫人，病老歸西的時候，我往你坟上替你馱一輩子的碑去。」

このように、ディスクール/イストワールは、意味から区別するのではなく、語の用法から見定めなければならない。

ところで、鈴木氏の次の批判は、より根底的な問題を含んでいる。

○中里見の議論が成立するためには、「文言と白話」が「histoire と discours」のレベルに対応することが証明されねばならないが、それは無理な話である。そもそも中里見の議論の対象は白話の物語言説に限定されており、その中で「文言」に属する指示詞を白話のそれと比較するのはどうであろうか。

ここで鈴木氏は「次日」を文言、「明兒」を白話と見なしているようである。会話文に現れる「明兒」がより口語的、地の文に現れる「次日」がより書面語的であろうことは容易に想像されるけれども⁽¹²⁾、同一テキストに現れる語彙を単語のレベルで文言/白話の違いに還元することは適切だとは思えない。またより重要なのは、そもそも文言/白話とディスクール/イストワールという二組の概念は、全く異なる範疇に属するものであり、文言にも白話にも等しくディスクール/イストワールの二面性は存在することである⁽¹³⁾。

以下の各章では、鈴木氏の批判によって明らかにされたこうした問題について、白話小説に限らず、文言文や現代小説のテキストも視野に入れて検討していく。ただし、本稿は網羅的な調査を意図するものではなく、ディスクール/イストワールの区別を、いくつかの限定されたサンプル内において確認することを目的とするものである。

3 白話小説におけるディスクール/イストワール

3.1 ディスクールとしての「-今」「今-」

『六十家小説』の中から「錯認屍」(a)「楊温攔路虎傳」(b)を取り上げ、使用されている時間の指示子を整理してみる。⁽¹⁴⁾

[表 1・a]

	今	即今	如今	至今	于今	今日	今夜	今晚	今年	今来	計
地の文	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	4
セリフ	13	1	9	1	1	4	2	1	1	0	33

[表 1・b]

地の文	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
セリフ	5	0	3	0	0	2	0	0	4	0	14

表 1 は、「-今」「今-」という指示子の分布を、二つの作品別にまとめたものである。圧倒的な割合でセリフにおいて用いられていることがわかる。この場合、作中人物の発話する物語

内容の時点が「今」の基準である。一方、「錯認屍」において地の文に散見される用例のうち三例までは、いずれも語り手の物語行為の時点を経準としている⁽¹⁵⁾。したがって、「－今」「今－」はセリフにおいても地の文においても、ともに言表行為に即して決定される時間を指示しており、ディスクールとしての用法を示している。

3.2 イストワールとしての「当－」「此－」「那－」「其－」

次の表はイストワールとしての時間の指示子の例である。

[表2・a]

	当時	当日	当晚	当夜	此時	那時	其時	其年	計
地の文	11	3	1	4	6	1	1	2	29
セリフ	0	0	0	0	0	0	0	0	0

[表2・b]

	5	1	0	1	0	0	0	0	7
地の文	5	1	0	1	0	0	0	0	7
セリフ	0	0	0	0	0	0	0	0	0

「当－」「此－」「那－」「其－」といった指示子は、地の文において、語り手が自分の語る物語行為の時間を離れて、物語内容の客観的なある時点を指すときに用いられている。典型的なイストワールの用法である。なお、「楊温攔路虎傳」においては「当－」系統しか使用されていない。

3.3 「次－」「明－」「昨－」

[表3・a]

	次日	明日	明早	明年	昨夜
地の文	9	0	2	0	0
セリフ	0	1	0	0	0

[表3・b]

	3	1	0	0	0
地の文	3	1	0	0	0
セリフ	0	3	0	1	1

表3は分布にばらつきがみられ、慎重な検討が必要である。まず明らかなのは、「次日」がイストワールの用法を示していることであり、『六十家小説』全体を調査しても同様の結果が

得られる。

それに対して、「明ー」はセリフにおけるディスクールの用例とともに、地の文におけるイストワールの用例も見受けられる。「明ー」の『六十家小説』全体での分布は、地の文6例に対して、セリフでは18例である。なお、地の文における「明日」は、「次日」と置き換え可能である。

○到 {明日/次日}，吃飯了，正與員外吃茶，只見二十人入茶坊來，（「楊温攔路虎傳」8葉a面，176. 13）

一方、セリフにおける「明日」は、「次日」と置き換えることはできない。

○（喬俊）說與高氏：「我 {明日/*次日} 起身去後，多只兩月便回。……」（「錯認屍」4葉a面，215. 16）

また「昨ー」はここではディスクールの一例しか挙がっていないけれども、『六十家小説』全体では、地の文3例に対して、セリフには8例が見い出される⁽¹⁶⁾。この場合も、地の文の「昨夜」は「前夜」と置き換え可能である。

○陳巡檢將 {昨夜/前夜} 遇申公⁽¹⁷⁾之事，從頭至尾，說了一遍。楊戩幹焚香請聖，陳巡檢跪拜，禱祝 {昨夜/前夜} 遇申公攝了孺人之事。（「陳巡檢梅嶺失妻記」7葉b面，128. 9）

一方、セリフの「昨日」は、「前日」と置き換えることはできない。

○如春說：「{昨日/*前日} 申公回洞，幾乎一命不存。」（「陳巡檢梅嶺失妻記」11葉b面，132. 8）

こうした一見錯綜した事実とは、次のように理解することが可能である。「明ー」は以下第4，5章で見るように、『史記』においてはイストワールであったのが，現代文においてはディスクールへと変化している。したがって，明代の白話小説においては，両方の性質を反映しているものと考えられる。一方，「昨ー」は『史記』から現代文に至るまで一貫してディスクールであるにもかかわらず，白話小説においてまれにイストワールとして用いられる場合が見い出されるのは，むしろ書面語としての白話の未熟に由来した混乱だと考えられる。⁽¹⁸⁾

3.4 例外的用法

「今ー」のように一般にディスクールとして用いられる指示子が，特殊な状況においては，言表行為の時点を示さないことがある。そうした例外的な用法を見てみる。

3.4.1 対比的用法

○今來千不合万不合將他絞死，後來自家被人首告，打死在獄，滅門絕戸。（「錯認屍」10葉b面，222. 9）

これは，先に「錯認屍」で地の文に用いられた四例の「今ー」のうち，保留しておいた一例で

ある。「今来」と「後來」とが対比的に用いられることによって、ディスクールの指示子が、物語行為の時点に束縛されず、物語内容の時間を指している。こうした例は少なくない。

○張二官當時見他殷勤，已自生疑七八分了，今日轆个滿懷，轆成十分。（「刎頸鴛鴦會」10葉a面，165. 1）

同様の例は、小説の中に挿入される詩詞にも見られる。

○正所謂：當時不解恩成怨，今日方知色即空。（「刎頸鴛鴦會」12葉a面，167. 9）

3.4.2 被伝達部における用法

話法の被伝達部においても、ディスクールの指示子が言表行為から独立して用いられることがある。

○郡吏以爲今夜必至。（「雪川蕭琛貶霸王」7葉b面，320. 15）

○（李）廣方知：始見時將謂真虎，乃施神力；今已知之，心中慢立，不能及也。（「漢李廣世號飛將軍」4葉a面，301. 7）

「以為」「知」という伝達動詞に導かれる被伝達部においては、時間の指示子は語り手ではなく、作中人物の発話の時点を指すことになるのである⁽¹⁹⁾。なお、後者は対比的用法を兼ねている。

4 『史記』におけるディスクール/イストワール

ディスクール/イストワールは言語の普遍的性質として、中国語においても、通時的、共時的とを問わず存在していたと考えられる。ただし、通時的には語彙の歴史的変遷によって、また共時的には口語と書面語、また方言などによって、形式的識別の指標となる個々の単語については違いを見極める必要があるだろう。ここではディスクール/イストワールが中国語にも普遍的に認められることを確かめるために、文言文の例として『史記』⁽²⁰⁾を、次章では現代文の例として魯迅を取り上げて考察する。

4.1 ディスクールとしての「今ー」

『史記』においてディスクール/イストワールの区別が明瞭に見て取れるのは、「今」/「是時」の対立においてである。

まず、ディスクールの用法として、セリフの中で圧倒的に優位を占める「今ー」の例を任意に挙げる⁽²¹⁾。

○於是張良至軍門，見樊噲。樊噲曰：「今日之事何如？」良曰：「甚急。今者項莊拔劍舞，其意常在沛公也。」（巻7 項羽本紀，313. 3）⁽²²⁾

『史記』全体で1317回用いられる「今」のうち、地の文に現れるのはきわめて少数であるが、ディスクールの用法を逸脱するものではない。

- 故至今謂之夏人。(巻129貨殖列傳, 3269. 3)
- 陘城今在中山國。(巻104田叔列傳, 2778. 5)
- 至今天下言脈者, 由扁鵲也。(巻105扁鵲列傳, 2794. 6)

セリフの「今」が会話の行われている作中人物の現在を基準としているのに対して、地の文の「今」はテキストが書かれる書き手の現在に移行している。ここに司馬遷の言表行為が露呈している。セリフでは作中人物の、地の文では語り手（ここでは作者）の言表行為の審級にかかわるのであり、いずれもディスクールとしての用法であることには変わらない。

言表行為の時点を離れて「今」が用いられるのは、例外的なものに限られる。

○始皇可其議, 収去詩書百家之語以愚百姓, 使天下無以古非今。(巻87李斯列傳, 2546. 13)
これも地の文の例であるが、「古」と「今」が対比されることによって、言表行為から独立した特殊な「今」の用法である。つまり司馬遷が『史記』を書いている今ではなくて、秦始皇や李斯の当時、すなわち過去の時点を指している。

4.2 イストワールとしての「是ー」

地の文で多く用いられるのは、「是」という指示子によって構成される、「是時」「是日」「是歳」といった一連の語彙である。これらは地の文において物語内容の時間を指すイストワールの用法である。

是 時	当是時	当是之時	当是時也	是 日	是 歳	是歳也	是 年
155	49	19	2	14	76	7	8

- 是時項羽兵四十萬, 號百萬。沛公兵十萬, 號二十萬, 力不敵。(巻8 高祖本紀, 364. 6)
- 當是時, 項王軍在鴻門下, 沛公軍在霸上, 相去四十里。(巻7 項羽本紀, 314. 4)
- 是歳, 越王句踐滅吳。(巻43趙世家, 1793. 1)

ほかに「此一」の系統の語もあり、「是ー」に比べて文脈指示の傾向が強いように思われるが、ここではこれ以上触れない。

当此之時	当此時
10	9

4.3 イストワールとしての「明ー」

「明ー」の系列は、『史記』ではイストワールとして使用されている。「あくるとし」を意味する語彙の分布は次のとおりである⁽²³⁾。

	明 年	其明年	明 歳
地の文	48	77	6
セリフ	1	0	0

「あくるひ」を意味する次の語彙は、イストワールとディスクール両方が見られるが、イストワールとしての用法が優勢だといえよう。

	明 日	其明日	明 旦	其明旦	平 明	黎 明	遲 明
地の文	19	1	0	1	5	1	1
セリフ	4	0	1	0	0	0	0

ただし、次のような例は、対比的用法とはいえ、明らかにディスクールとして使用されており、後代の用法と一致している。

○周子曰：「……今日亡趙，明日患及齊楚。……」（巻46田敬仲完世家，1902. 3）

○范雎曰：「……臣知今日言之於前而明日伏誅於後，然臣不敢避也。……」（巻79范雎列傳，2407. 1）

なお、後者の例は伝達動詞「知」の被伝達部でもある。⁽²⁴⁾

4.4 ディスクール/イストワールに非関与的な「旦日」

では、「あした」を意味するディスクールには、どのような指示子があるのだろうか。

	旦 日
地の文	5
セリフ	8

「旦日」が地の文に現れて、イストワールとして機能している例は次のとおりである。

○沛公旦日從百餘騎來見項王，至鴻門，（巻7 項羽本紀，312. 8）

○亞父勸項羽擊沛公。方饗士，旦日合戰。是時項羽兵四十萬，號百萬。沛公兵十萬，號二十萬，力不敵。（巻8 高祖本紀，364. 5）

- 旦日視其書，乃太公兵法也。（張）良因異之，常習誦讀之。（卷55留侯世家，2035. 6）
- （彭越）與期旦日日出會，後期者斬。旦日日出，十餘人後，後者至日中。（卷90彭越列傳，2591. 4）

一方，会話文に現れて，ディスクールとして機能している例は次のとおりである。

- 項羽大怒，曰：「旦日饗士卒，爲擊破沛公軍！」（卷7項羽本紀，311. 2）
- （項伯）謂沛公曰：「旦日不可不蚤自來謝項王。」（卷7項羽本紀，312. 5）
- 灌夫曰：「……請語魏其侯帳具，將軍旦日蚤臨。」（卷107魏其武安列傳附灌夫傳，2848. 2）
- （平原君）迺求見孝惠幸臣閼籍孺，說之曰：「……今日辟陽侯誅，旦日太后含怒，亦誅君。……」（卷97酈生陸賈列傳附平原君傳，2703. 3）
- 穰苴既辭，與莊賈約曰：「旦日中會於軍門。」（卷64司馬穰苴列傳，2157. 5）
- 司馬夜引袁盎起，曰：「君可以去矣，吳王期旦日斬君。」（卷101袁盎列傳，2743. 5）
- 臣（淳于）意（＝太倉侯）對曰：「……臣意復診之，曰：『當旦日日夕死。』……番陽入虛裏，（項）處旦日死。……」（卷105倉公列傳，2812. 9）

最後の例は，「わたくし淳于意はもう一度診察し，『あすの夕方に死ぬでしょう』と言った。……番陽が虚裏に入り，項処はよくじつ死んだ。」と翻訳でき，「あす」というディスクールにも，「よくじつ」というイストワールにも，ともに「旦日」が用いられている。

このように『史記』の用例からみる限り，「旦日」はイストワール/ディスクールの区別に非関与的で，どちらにも使用されうるのである。

4.5 ディスクールとしての「昨ー」

一方，「昨日」「昨暮」はディスクールとしての用例しか見られない。

	昨日	昨暮
地の文	0	0
セリフ	2	4

このように，『史記』を概観することによって，「今ー」/「是ー」の対立がディスクール/イストワールに相当し，また「明ー」はイストワール中心，「昨ー」はディスクールのみの用例しか見いだされることがわかった。文言文においても，こうした時間の指示子の使い分けによって，文章に限定が課せられているのである。

5 魯迅「故郷」におけるディスクール/イストワール

5.1 規範的用法

現代文における時間の指示子には、ディスクール/イストワールの区別が明瞭に反映している。それをまとめると次のようになる。

○ディスクール

「如今」「現在」を中心とした、「昨天～今天～明天」という系列

○イストワール

「此時」「這時候」を中心とした、「前日～此日～次日」「前一天～這一天～第二天」という系列

この場合、「此時」は書面語的で、「這時候」は口語的であるという違いにもかかわらず、ともにイストワールであるという点では一致する。つまり書面語か口語かという問題と、ディスクール/イストワールの問題とは、範疇を異にするのである。

次の二例は魯迅「故郷」のものであるが、「現在」というディスクールは語り手の語る物語行為の時間を指し、一方「那時」というイストワールは語り手によって語られる物語内容の時間を指している。

○我認識他時，也不過十多歲，離現在將有三十年了；那時我的父親還在世，家景也好，我正是一個少爺。(477. 19)⁽²⁵⁾

○我那時並不知道這所謂獐的是怎麼一件東西——便是現在也沒有知道——只是無端的覺得狀如小狗而很凶猛。(479. 6)

こうした時間の指示子の使い分けによって、読者は物語行為と物語内容とを混同することなく、テキストを読み進めることができるのである。事実、魯迅の大部分の作品において、時間の指示子はこのように明確に使い分けられている。

5.2 規範的用法からの逸脱

ところが、「故郷」「社戯」「傷逝」のような魯迅の回想型式の円熟した作品群においては、上に挙げた規範的な用法を逸脱する例が見られる。

○我們多年聚族而居的老屋，已經公同賣給別姓了，交屋的期限，只在本年，(476. 14)⁽²⁶⁾

○現在我的母親提起了他，我這兒時的記憶，忽而全都閃電似的蘇生過來，似乎看到了我的美麗的故鄉了。(479. 23)

○那西瓜地上的銀項圈的小英雄的影像，我本來十分清楚，現在却忽地模糊了，又使我非常的悲哀。(485. 4)⁽²⁷⁾

ここで「本年」「現在」というディスクールは、物語行為ではなくて物語内容を指している。本来なら「這一年」「這時」などのイストワール系の指示子が用いられるべきところに、ディ

スクール系が使用された結果、あたかも語り手が物語内容の世界に入り込んで、そこから語りかけているような効果が生まれている。ここではもはや物語行為と物語内容の境界は不明確で、融合している。これを次のようにイストワール系の指示子に置き換えてみると、物語行為と物語内容という二つの時間軸が回復されることがわかる。

○我們多年聚族而居的老屋，已經公同賣給別姓了，交屋的期限，只在 {本年/這一年}。

○{現在/這時} 我的母親提起了他，我這兒時的記憶，忽而全都閃電似的蘇生過來，似乎看到了我的美麗的故鄉了。

○那西瓜地上的銀項圈的小英雄の影像，我本來十分清楚，{現在/這時} 却忽地模糊了，又使我非常的悲哀。

ディスクール/イストワールの識別が重要なのは、ジュネットが指摘したように、それが物語行為と物語内容という二つの異なるレベルをテキストに生み出すからである。ところが、上に挙げた「故郷」の例では、ディスクールとイストワールの混合によって、語り手と作中人物の境界は融合している。魯迅の一連の回想型式の独特の抒情はこうしたテキストの性質によってもたらされているのだ。こうした特徴を最大限に発揮したのが「傷逝」であり、どこまでが現在回想する語り手の言葉で、どこからが当時の私の想念なのかが不分明で、読者をいらだたせるほどまでになっている。

中国語においても、時間の指示子の規範的な使用によって、ディスクール/イストワールという言葉の二面性が確保され、その結果、物語行為/物語内容を混同することなく表現することが可能であった。しかし、魯迅の一部のテキストでは、時間の指示子の使い分けが放棄され、既存の秩序的言語の世界は崩壊している。そこに「故郷」や「社戯」の回想の抒情が生まれ、「傷逝」の悔恨が表現され、高度な文学的達成を示している。こうしたアヴェンギャルドなテキストこそ、今世紀の作家たちによって追求された形式であったのであり、魯迅はその意味で、ジョイスやプルーストらと同時代の作者であったといえる。⁽²⁸⁾

6 おわりに

形態変化のない中国語においては、時間の指示子の使い分けが、ディスクール/イストワールの形式的識別の指標となることを述べてきた。そして最後の魯迅の例では、非規範的用法が特異な文学的効果をあげているを見た。

ディスクール/イストワールの区別は、およそあらゆる局面に有標無標を問わず関与している⁽²⁹⁾。本稿はこうした言語の特性⁽³⁰⁾について、最も容易に把握可能な時間の指示子に限った考察であった。今後は、時間の指示子やその他の指標について、共時的また通時的に、より綿

密な調査に基づいた記述を行うことが必要であろう。

このような形式的識別が文学的分析にとっても基礎となることは、ジュネットの物語論がディスクール/イストワールの区別を発展させたものであることから明らかである。こうした基礎の上に立ってはじめて、鈴木陽一氏のいう「(マークのない部分も含めた) 物語行為、或いは物語言説のシンタックス総体を議論すること」⁽³¹⁾や、ロラン・バルトのいう「文学的分析をやっている人たちは存在しないような形の言語学を要求するというようなこともなくてはならない」⁽³²⁾という提言が、重い課題として立ち現れてくることになるだろう。

注

- (1) ジュネット、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール——方法論の試み』（書肆風の薔薇、のち水声社、1985）15～23頁。
- (2) ことばの二面性という原理は、言語学史的にはソシュールに由来している。バンヴェニスト「ソシュール没後半世紀」（岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房、1983）44～45頁。
- (3) ソシュール、小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店、1972）95～97頁。
- (4) ジュネット「物語の境界」（花輪光監訳『フィギュールⅡ』書肆風の薔薇、1989）71～79頁、およびジュネット『物語のディスクール』249～252頁参照。
- (5) バンヴェニスト「フランス語動詞における時称の関係」（前掲書所収）219～223頁。下線は原著のイタリック体。一部中里見の改めたところがある。
- (6) バンヴェニスト「代名詞の性質」（前掲書所収）
- (7) ヴァインリヒ、脇阪豊ほか訳『時制論』（紀伊国屋書店、1982）18～20頁。下線は原著のイタリック体。
- (8) 『文化』56-1・2、1992. 9。
- (9) 『中国古典小説研究動態』6、1993. 5。
- (10) 愈平伯校訂『紅樓夢八十回校本』（中華書局香港分局、1985）235頁。
- (11) 太田辰夫『中国歴代口語文』（朋友書店、1982改訂版）45頁。太田辰夫『中国語史通考』（白帝社、1988）405頁には、民国13年の社会小説『北京』の“明兒”について、「これは将来の意の副詞として用いている」として、
○你們那位明兒給畫一畫題一題。
という例を挙げる。しかしこれも「次日」と置き換えることは不可能である。
- (12) 太田辰夫『中国語史通考』300～302頁には「会話の文と地の文」に関する記述がある。
- (13) この点について、バンヴェニストは次のように明言している。
○歴史叙述（イストワール：中里見補。原文は *récit historique*）と話（ディスクール：中里見補）の間にたてたこの区別は、書く言語と話す言語の区別とはなんら一致するものではない。（「フランス語動詞における時称の関係」223頁）
なお、白話も口語を多分に反映した書き言葉と見なすべきで、そのまま話し言葉と考えること

はできない。

- (14) 『六十家小説』のテキストは、a・bの影印本を底本とし、cの校点本を参照した。引用には、
a・bの葉数と表裏、cの頁・行数を記す。
a『清平山堂話本』（拋内閣文庫蔵残本十五篇影印、古今小品書籍印行会、民国18年）
b『雨窓欹枕集』（拋天一閣旧蔵残本十二篇影印、馬廉平妖堂、民国23年）
c 譚正璧校点『清平山堂話本』（上海古籍出版社、1987）
- (15) ○話說大宋仁宗皇帝明道元年，這浙江路寧海軍，即今杭州是也。（1葉a面，213. 1）
○就央人賃房一間，在銅錢局前，今對貢院是也。（3葉b面，215. 12）
○至今風月江湖上，千古漁樵作話傳。（18葉a面，230. 3）
残る一例は例外的用法として、対比的用法の項で取り上げる。
- (16) 詩詞に現れる2例は除外した。
- (17) 原本では「公」字を脱落するが、校点本に従って補った。
- (18) 引用した「陳巡檢梅嶺失妻記」の「昨夜」の2例が同一テキスト内の前後であることも、こうした考えを裏付ける。
- (19) 例えば英語では、直接話法のtodayは、間接話法ではthat dayへ転換される。こうしたダイクシスの転換が中国語では顕著でないことは、統辞的規則によって直接話法と間接話法を区別する話法の研究方法が、中国語には必ずしも有効でないことを示唆している。原田寿美子「直接引用と間接引用に関する二、三の考察」（『中国語学』239, 1992）91～92頁参照。
なお、ディスクール/イストワールと話法の関連については、バンヴェニストが指摘している。「フランス語動詞における時称の関係」223頁参照。
- (20) 一般には書かれた内容が史実か虚構かによって、歴史と小説とに分けられるけれども、テキストの形式分析の立場からは、語り手が物語内容を語るという物語（ナラティブ）の形式を両者が共有することから、比較対象のサンプルとして取り上げることが可能になる。
- (21) 用例の検索には、李曉光・李波主編『史記索引』（中国廣播電視出版社、1989）を利用した。
- (22) 『史記』のテキストは中華書局排印本1982年第2版により、その頁・行数を示す。
- (23) セリフに現れる唯一の用例は次のもので、対比的用法になっている。
○（蘇秦）於是說韓宣王曰：「……大王事秦，秦必求宜陽、成臯。今茲效之，明年又復求割地。……」（卷69蘇秦列傳，2253. 1）
- (24) セリフに現れる「明一」の残る三例は以下のとおりで、いずれも典型的なディスクールの用法とはいえない。
○孫子謂田忌曰：「……使齊軍入魏地爲十萬竈，明日爲五萬竈，又明日爲三萬竈。」（卷65孫子列傳，2164. 4）
○（馮驩）曰：「……君獨不見夫趣市朝者乎？明旦，側肩爭門而入；日暮之後，過市朝者掉臂而不顧。……」（卷75孟嘗君列傳，2362. 12）
- (25) 「故郷」のテキストは、雑誌初出（『新青年』9-1, 1921. 5）・初版本影印（『呐喊』上海文芸出版社、1990）・人民文学出版社1981年版全集本を参照し、全集本の頁・行数を付した。
- (26) 雑誌初出では、「今年」に作る。
- (27) 初出および初版本は、「影象」「模胡」に作る。

- (28) 魯迅のテキストについては、「回想する「我」/独白する「我」——魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡」と題する、第42回東北中国学会大会（1993年5月30日、弘前大学）での口頭発表をもとに、別稿を用意している。
- (29) 例えば、○去不去？——去。/不去。
○去了没有？——去了。/没去。
○去過没有？——去過。/没去過。
- といった簡単な文においても、最初の例は話し手と聴き手の言表行為の場面に関わるディスクール用法であるのに対して、後の二例は過去のある時点での出来事を述べたイストワール用法であることが理解できる。この場合は否定の「不」/「没」に形態上の差異が見られる。ただし、「不」/「没」の対立がすべてディスクール/イストワールに対応するとは限らない。
- (30) 認知科学の成果により、人間の認知の営みが言語のあり方に深く関わっていることが明らかにされつつある。ディスクール/イストワールも、人間の基本的な認知の様態の言語における現れと見なすことができよう。本稿で引用したバンヴェニストの諸編が、「言語における人間」という章に収められていることも、そのことを示唆する。池上嘉彦「学術文庫版のための訳者解説追補」（ウォーフ、池上訳『言語・思考・現実』講談社学術文庫、1993）参照。
- (31) 「小説研究の方法をもとめて——中里見論文を評す」15頁。
- (32) Nicolas Ruwet の *Linguistics and Poetics* と題する発表に続く討論における Roland Barthes の発言。Macksey, R. and Donato, E., eds. *The Languages of Criticism and the Sciences of Man: The Structuralist Controversy*, Baltimore, 1970, p. 316.

本稿は、1993年8月の中国古典小説研究会夏合宿（於磐梯熱海）での口頭発表に、修正を施したものである。司会の岡崎由美氏をはじめ、鈴木陽一、橋本堯、小野四平の各氏よりご教示いただいたことに感謝する。

（1993年8月27日受理）

漢語文本中的敘述文與歷史文 —— 分析用來作為指標的時間指示詞 ——

中 里 見 敬

(教養部 公共漢語教研室)

法國語言學者 Émile Benveniste 指出的一對著名概念，即敘述文 discours 與歷史文 histoire 闡明了語言的普遍性的一個側面。漢語沒有形態變化，所以不可能像印歐語那樣根據時制和人稱等形態來區別。但漢語的時間指示詞的用法却明確地反映出敘述文/歷史文的不同。漢語文本中也有敘述文/歷史文這雙重性質，它把敘述者的敘述時間/作中人物的故事時間表現得十分清楚、不會發生混亂，從而使敘述故事或故事被敘述得以成立。

本文將探討辨別敘述文/歷史文時用來作為指標的時間指示詞。在現代漢語中，“如今”“現在”“昨天～今天～明天”這一系列是屬於敘述文的，而“此時”“前日～此日～次日”“這時候”“前一天～這一天～第二天”這一系列是屬於歷史文的。同樣的現象也存在於古代漢語的白話文和文言文當中，但作為指標的個別指示詞由於詞語的歷時性變化有些變動。

Benveniste 的理論後來發展成熟奈特 Gérard Genette 的敘事 récit/ 敘述 narration/ 故事 histoire 之分，從而也可以看出以語言學為基礎的文學研究能不斷開拓新的領域的可能性。只有正確地把握語言的基本性質，纔能進行踏踏實實的文學文本分析。巴爾特 Roland Barthes 曾說：“研究文學的人有時要求還沒有出現的語言學也是很有必要的。”這句話對文學研究者是極富有啟發意義的。